# 「棡（杠）」「楪（櫟）」と「ゆずりは」

寺井　泰明

キーワード：棡と杠、樹と植、弓弦葉と譲り葉、神饌、
かしわ、楪子（ちゃつ）

## １．はじめに

常緑高木「ゆずりは」[1]には多様な漢字が当てられてきた。古くは「弓弦(絃)葉」が主流で、『万葉集』や『延喜式』もそのように表記していたと推定される[2]。しかし、やがて「譲葉」が用いられるようになり、現代では「譲り葉」と仮名混じりで表すのが一般となっている。一方、古来「楠」「棡」「杠」「櫟」「楪」「榕」「椹」などが、また、現代では「交譲木」などが「ゆずりは」の“漢名”として扱われてきたが、これらの“漢語”の多くには、所謂“国字”“国訓”といった“和製漢語”の臭いがつきまとう。
これまでにも、で、「ゆずりは」に「楠」字をあてることの是非について考察したのを契機として[3]、「ゆずりは」の漢名との同定について考察を重ねてきたが、本論文は、地名・寺社名で用いられる漢字や日本の古辞書に残る用法から考察を進め、「棡」「杠」と「櫟」「楪」について得られた一応の結論を提示する。但し、「楠」「交譲木」「譲木」との同定について、その当否を検討することに関しては、別稿を立ててまとめることとする。

## ２．「ゆずりは」の日本での漢字表記

「ゆずりは」の漢字表記についての状況を整理するために、日本国内の古辞書類で「ゆずりは」の漢字表記を見ておくこととする。辞書がその時代の、あるいはそれ以前の時代に成った諸文献の用字・用語法を映す鏡であることは言うまでもない。ただ、古辞書類は漢字の用法を示すことを目的としているが、固有名詞は必ずしも収録しない。一方、地名や寺社名に含まれる「ゆずりは」には、鶴に関連づけられた「諭鶴羽」「遊鶴羽」といった表記が残っていたり、樹木の「ゆずりは」を由来とする伝承も多く存在していたりするので、それらの漢字表記について、事前に概観しておきたい。

### ⑴　地名・寺社名の「ゆずりは」

「ゆずりは」を詠んだ『万葉集』巻第十四の譬喩歌に登場する「阿自久麻山（あじくまやま）」の所在については諸説あって定まらない[4]が、『古代地名大辞典』は「現在のつくば市平沢の北にある小飼山，もしくはかつて小字（通称）アジマがあった平沢山が考えられる」としている[5]。同書は『光経集』からも、「春もなほあじくまやまは風さえてゆづるはしろく雪ぞふりつつ」の一首を引いているが、これは『新撰六帖』などの藤原家良や光俊の歌などと同趣旨で、この山が「ゆずりは」で有名な歌枕であることと、「ゆずりは」と言えば山の雪に映える常緑の葉としての印象が定着していたことが窺える。同じく『万葉集』の「ゆづるはの御井[6]」などに見られるように、山以外の「ゆずりは」も歌題にならなかったわけではないが、“山のゆづりは”がその山の名の起源ともなったと考えられている例も幾つか存在する。

「日本古典文学全集」の『枕草子』第十二段に、「峰はつるはの峰。あみだの峰」などとあり[7]、この「つるはの峰」について同書の頭注は「所在未詳」としているが、同時に三巻本、前田家本は、「つるはの峰」ではなくて「ゆつるはのみね」であることを記した上で、「それなら兵庫県にあるという」と記している[8]。『倭訓栞』も、根拠は示さないながら、「ゆつりの葉の岳ハ攝津國武庫ノ郡にあり 枕草帋に見ゆ」などしている[9]。これらは現在の六甲山を指すと見られる。山麓の御影駅近くにある弓弦羽（ゆつるは）神社の社伝「弓弦羽神社の歴史」は、神功皇后の戦功や熊野大神との関係を記したあと、「神社背後の秀麗な峰を弓弦羽嶽と呼び六甲山とも唱う」と記している[10]。ただし、この「秀麗な峰」が六甲山脈全体を指すのか、その中の一峰を指すのかは不明確である。また、謡曲「船弁慶」には、瀬戸内海を舟で行く義経一行に強風が襲いかかった時、弁慶がそれを「武庫山おろし譲葉（ゆづりは）が岳（だけ）より吹き下ろす嵐」と称している[11]。日本古典文学全集『謡曲集（２）』の頭注は、この「武庫山」を「六甲山の旧称」、「譲葉が岳」を「六甲山の支峰」としていが、この「支峰」も現在のどの峰に当たるのかは明示していない。

一方、現在、六甲山脈東端の宝塚市に「譲葉山」と称する山があり、元禄十四年刊の岡田徯志撰『摂陽群談』巻第三「山の部、譲葉嶽」には、

> 川邊郡小林村の後にあり、所傳云、此山嶽杜葉多く有て、元朝の飾り、市中に出して商之。淫雨洪水山を崩し、草木悉く土中に埋み、荒廃の嶽と成て、名のみ殘り〔下略〕

とある[12]。「小林村」は現在の宝塚市の西南部にあたる地区の旧称である。「杜葉」は、後述するが「ゆづりは」と訓むと思われ、それが山の名になったとするのである。日本歴史地名大系『兵庫県の地名』もこれを引いて、「ゆづるはの峰」は「当地（小林村）の譲葉（ゆずりは）山に比定される」としている[13]。『摂陽群談』には近辺に「譲葉窟」「譲葉瀧」などの記載も見え、「ゆずりは」が地名の由来となった可能性を感じさせる[14]。

また、前掲の『古代地名大辞典』は「ゆづるはの峰」を淡路島の諭鶴羽（ゆつるは）山に比定しており[15]、12 世紀の『長寛勘文』にある「熊野權現御垂迹縁起」にも「淡路國乃遊鶴羽（ゆつるは）乃峯」の記述がある[16]。淡路島の南端に近く海から切り立った山は、平安時代には修験道の一大

霊山として隆盛を誇ったという[17]。山頂近くの諭鶴羽山神社の本殿横には「神樹ゆずりは木」が植えられているが、社叢は現在もヒメユズリハを含む照葉樹林に覆われ、山名も「ゆずりは」が多く見られることからと伝えられている[18]。

ともあれ、『枕草子』の「ゆづるはの峰」の所在は「未詳」とせざるをえないほど、諸説あって定まらないのが実情のようであるが、その峰が、名の由来となるほど「ゆずりは」が多く生育していたとすれば、「ゆずりは」への信仰が峰への信仰ともなって、清少納言の心に残ったと見ることは可能であろう。

また、福井県小浜市の橿山明通寺（ゆずり　みょうつうじ）の縁起について、前掲「日本歴史地名大系」第一八巻『福井県の地名』が引く「建武元 (1334) 年一二月日付明通寺衆徒等奏状案（明通寺文書）」が記すところを要約すると以下の如くである[19]。

> 延暦年中、坂上田村麻呂が国守であった時、ひそかに願を懸け、蘭若の勝地を求めて鏑矢を放ったところ、その矢が落ちた山中には一人の沙門が草菴を構え、橿木を本尊に擬して行法端坐していたが、矢はこの木にあたっていた。この沙門によれば、山中で久しく暮らすうち、赫々たる光明を見たことがあり、近づいてみたらそれは医王善逝であった。嬉しさのあまり抱きついたところ、橿木に変わってしまった。爾来その霊木を礼拝供養しているとのことであった。田村麻呂はそこでその木で等身之像を造立した。以来、光明が山川に常通したので寺号を明通寺とした。

この「橿木」は「ゆづりぎ」と読み、その葉が「ゆづりは」ということであるが、境内には現在ユズリハの大木があり、また、境内にはユズリハが多く生えている[20]。土地の自然に適合した樹木と思われる。なお、「橿」字を「ゆづる」「ゆづるは」と読むことについては後に詳述するが、この読み方は山梨県上野原市橿原（ゆずりはら）など、地名にも多く残っている。また、「ゆずりは」に関する古地名としては、このほかにも、「弓弦羽里」「弓絃葉里」などが各地に存在していたことが確認できる[21]。

以上、地名や寺社名に見える「ゆずりは」を見てきた。古い伝承に拠る所が多く、確たる証拠に乏しいが、その由来をたどる時、信仰との関わりを強く感じさせるものが多いのは、この樹の常緑葉への信仰が根底にある故であろう。そして、これら「ゆずりは」「ゆづるは」の漢字表記としては、弓に関する「弓弦葉」や「弓弦羽」、弓との関係を感じさせつつも用字にはそれを表さない「橿」、また、鶴に関する伝承を受けた「諭鶴羽」や「遊鶴羽」、そして、「杜葉」「譲葉」などが行われていたことが分かる。

### ⑵　日本の古辞書類の「ゆずりは」

まず、中古の面影を残す『色葉字類抄』の諸本には、次のようにある[22]。

樹　ユツリハ　杠 同　（前田本色葉字類抄）
樹　ユツリハ　杠 同　（黒川本色葉字類抄）
樹　ユツリハ　杠 同　（十巻本伊呂波字類抄[23]）室町初期写
樹　ユツリハ　杠 同　（二巻本世俗字類抄[24]）寛政 12(1800) 年頃写

前田本の「樹」の字形は「艹（草冠）」が下の「豆」と繋がり、一見したところでは「土」のようにも見える。十巻本伊呂波字類抄、二巻本世俗字類抄の「杠」以外の字体については後に記すが、前田本の字形と同工異曲で、いずれも「樹」の異体と見なして良いと思われる。また、『類聚名義抄』では僅かに「観智院本」に次のようにある[25]。

植　ユツルハ　（佛下本八五）

杜　音度 フサク トツ モリ ユツリハ シフシ　（佛下本一〇九）

この「植」は、書体が崩れて字形の判読がやや難しく、また、直前にも別途「植」字があるが、やはり、「植」の異体字と見なして良いと思う[26]。結局、「樹」「植」「杠」「杜」の４字に「ゆずりは（ゆつるは）」の訓が付されていたことになるが、「杜」は「杠」と互いに混同されていた可能性が高い。なお、『新撰字鏡』や『倭名類聚抄』からは「ゆずりは（ゆつるは）」の訓を得た漢字を見出すことはできない[27]。

次に、中世から近世にかけての辞書類の諸本の記載を、文字通り管見の及ぶ限りではあるが順不同に列挙してみる[28]。

杠（ユヅリハ）　日本ノ俗 正月ニ用之ヲ、漢字ニハ旗（ハタ）ノ竿（サホナリ）也　（元和三年版下学集[29]）1617 年

杠（ユヅリハ）　日本ノ俗 正月ニ用之ヲ、漢字（カン）ニハ旗竿（ハタノサホナリ）也　（増補下学集[30]）1669 年

檪（ユヅリハ）　杠（同）　弓弦葉（同）　（伊京集[31]）室町写：14~16 世紀

檪（ユツリハ）　或作杠　正月所用　漢字ニハ杠旗飾　（文明本節用集[32]）文明：15 世紀、室町中期写

檪（ユツリハ）　杠（ユツリハ）　正月用之　（明応五年本節用集[33]）1496 年

檪（ユツリハ）　勻書無之　或作杠 正月用之　（弘治二年本節用集[34]）1556 年

弓強葉（ユヅリハ）　正月用之　又作榕　（天正十八年本節用集[35]）1590 年

檪（ユヅリハ）　杠（同）　弓弦葉（ユヅリハ）　檪（同）　（易林本節用集[36]）1597 年

檪（ゆづりは）　志だ――　（和漢通用集[37]）室町時代

檪（ユヅリハ）　或作杜　正月ニ用之　勻書無之　（図書寮本節用集[38]）室町時代

檪（ユヅリハ）　或作杜　正月用之　漢尺日旗飾　勻書無之　弓弦葉（ユツルハ）　正月用之　又作榕

（枳園本節用集[39]）室町末期写

檪（ユヅリハ）　又作杜 正月用之　（黒本本節用集[40]）室町末期写

榕葉（ユヅリハ）　（饅頭屋本節用集[41]）室町末期写

檪（ユヅリハ）　杠（同）　弓弦葉（同）　兵家ノ口決　（書言字考節用集[42]）1698 年

檂（ユツリハ）　樹（同）　杜（同）　椚（同）　（温故知新書[43]）文明 16（1484）年

檂（ユツリハ）　樹（同）　杠（同）　椚（同）　橡（同）　榛（同）　（塵芥[44]）16C 前半

檪（ユツリハ）　椚（同）　杠（同）　榕葉（同）　檍（同）　桓（同）」（七巻本世俗字類抄[45]）室町中期写

杜　ト反 フサク ユツリハ モリ　（拾篇目集[46]）室町中期写

榛　ユツリハ　（倭玉篇篇目次第[47]）室町中期写

樹　ユツリハ タイ　（玉篇要略集[48]）1524 年

杜　モリ トツ ト　（同上）1524 年

杜（ト）　マユミ ユツリハ トツル フサクモリ　樹（タイ）　ユツリハ　（玉篇略[49]）1532 年

杜（ト）　ユツリハ フセク トツ　樹（クイ）　ヲソヒ ユツハリ　（弘治二年本倭玉篇[50]）1556 年

杠（カウ）　アヲキ アグル ユヅリハ ハタザヲ　（倭玉篇慶長十五年版本[51]）1610 年

杼（チヨ）　トチ ユヅリハ ヒ　杜（ト）　ヲク トヅル ユヅリハ クダク フザグ ヤシロ　（同上）

樹（タイ）　ユヅリハ　（同上）

樹（ジュ）　ウヘキ ハヤシ タツル クツキ　（同上）

植（チ・ショク）　ウユル タ子 ホドコス タツル　（同上）

楕（シ）　ユツリハ ムクノキ　（米沢文庫本倭玉篇[52]）室町後期〜江戸写

杜（ト）　トツル ヒヱル フサク　（同上）

樹　ユツリハ　（同上）

楪　由豆利波　（多識編寛永七年刊古活字本／改正増補多識編／寛永八年刊整版本[53]）1630 年

これらの他には、「ゆずりは」には一部に本草とし扱われた経緯もあるので、『本草和名』の表記が気になるところであるが、記載は見いだせない[54]。さらに、『日葡辞書』にも、樹木としての「ゆずりは」の記載は無い[55]。

こうした古辞書類における「ゆずりは」の漢字表記の状況は、次のようにまとめることができるだろう。これで、資料調査が十分とは言えないものの、状況の概略を知ることはできよう。

①　ここに見た古辞書類はそもそも“漢和辞典”的性格が強いため、和語に漢字を当てた「弓弦葉」などの例は少なく[56]、「譲り葉」「譲葉」も見出せない。また、漢語の「交譲木」「譲木」といった表記法も見当たらない。『類聚名義抄』（観智院本）に「ユツルハ」の訓が見えるだけで、あとは全て「ユヅリハ」「ユツリハ」である。語音の「ゆづるは」から「ゆづりは」への変化は、日本人の意識が「弓弦葉」から「譲る葉」を経て「譲り葉」「譲葉」へと変貌していった過程を示すと思われるが[57]、その変貌も、『類聚名義抄』（観智院本）の鈔写時期に前後して、既に始まっていると思われる。しかし、それがさらに漢語の「譲木」や「交譲木」に“同定”され定着するには、もう少し時間が必要だったものと思われる。漢語の同定については稿を改めて詳述するが、「交譲木」「譲木」などを記した漢籍は日本でも目にされていたはずである。恐らくは、まだそれが「ゆずりは」だとは意識されていなかったのであろう。それは、後に「ゆずりは」に同定される「楠」についても同じで、以上の資料からは、「楠」を「ゆずりは」と見なすような痕跡は窺えない。

②　「弓弦葉」を除けば、下学集と節用集の諸本では主に「杠」と「樸」「楪」が、また倭玉篇の系統では主に「杠」と「樹」「樹」などが、それぞれ異体字を含みつつ「ゆづりは」と訓まれる傾向にある。また、「樸」「楪」やその異体字を「ゆづりは」と訓む例は中世以降に見られ、中古以前には見出せない。この点は後にも触れる。

③　現代では樹木名を指すことのない「樹」「植」といった字が、「ユツリハ」「ユツルハ」に当てられていたが、その用法は早くに消滅したかに見える。例えば、「倭玉篇慶長

十五年版本」では「樹」「植」とも、「ゆずりは」の語義は記されていない。しかし、「樹」の甲骨文や石鼓文に「𡘇」があり、『説文解字』も「樹」の籀文として「𢼸」を掲げている[58]。また、『宋元以来俗字譜』によれば「樹」が広く俗用されたことも確かであろう[59]。こうして見れば、「樹」（温故知新書）も「樹」の異体字に違いない。また、これは上述「樹」（前田本色葉字類抄）にも近い字形である。さらにそれが「樹」（十巻本伊呂波字類抄）や「樹」（玉篇要略集）などの字形に通じることも自然に見て取れるであろう。また、『塵芥』と『温故知新書』の記述を並べて見れば、「樹」（塵芥）も「樹」（温故知新書）を受け継いだものと推定されるし、「樹」（二巻本世俗字類抄）や「樹」（米沢文庫本倭玉篇）も、右旁の形を大きく変えてはいるが、同じく「樹」の異体と見なすことができよう。

実は、「樹」（玉篇略）の字形は『新撰字鏡』や『篆隷萬象名義』にもあり、次のように記されている[60]。

樹　者憤反 車葙切 牟志比也（天治本新撰字鏡）

樹　都憤反車葙切也（『篆隷萬象名義』）

これらの字解は、『大廣益會玉篇』の、「樹　都潰切車箱亦作轛」と基本的に同じである[61]。しかし、同書の「樹」は『説文解字』を承けて、

樹　時注切木揔名　　𢼸　籀文

と説明しており、「樹」とは明確に区別されている。つまり、「樹」は本来「樹」と書いて「タイ」と読むべきであり、「樹」とは区別すべき字である。ところが、倭玉篇の系統には「樹」「樹」やその類似形に「タイ」の仮名を付けつつも「ユツリハ」の訓を与えたものがある。恐らくは、「樹」と「樹」を混同し、「樹」の訓「ユツリハ」を「樹」に与えたのであろう。「樹」などの、一見したところでは「樹」にも「樹」にも見える奇妙な字形は、「樹」と「樹」の両者を混同して生まれた混合形、中間的字形としてあったと推測することができる。そして、異体字も含めて見れば、「樹」を「ゆずりは」と訓むことも、相当長期に亘って行われたことになる。

一方、「植」についても、例えば上記『大廣益會玉篇』や『篆隷萬象名義』には、

植　時織切 根生之屬也 樹也 置也 又除吏切 養蠶器也　（大廣益會玉篇）

植　時織反 樹也 置也 立也 槌也 縋也 志也　（篆隷萬象名義）

とあって、やはり「樹」と同義に認識されていたと思われる。また、「植」（七巻本世俗字類抄）も「植」異体字かと思われる。

④　「杠」と「杜」、および「樸」「樸」と「樸」「樸」が、それぞれやや類似した字形で「ゆずりは」と訓まれている。各字の字義については、先行する辞書の記述が継承されていく一方で、字形の鈔写については厳密性に欠けるところがあったように見受けられる。例えば、「杠」と「杜」が別字として区別されていたかどうかは疑わしいし、「樸」字の「世」が「丗」や「云」になるのは勿論、「茉」が「糸」となったり、草冠が取れて「樸」となったりすることについても、比較的無頓着だったと思われる。こうして見れば、『多識編』の「樸」も「樸」の変形と見ることが可能かも知れない。

⑤ 「榕」「提」「檂」「檍」「橡」「杼」「椪」なども、用例は少ないながら、一部に「ゆずりは」として認識された形跡がある。ただ、「榕」については、節用集の諸本を並べてみると、「櫟」が誤認・誤写された可能性も感じさせられる。因みに、漢語の「榕」はユズリハと同じく常緑広葉樹であるが、亜熱帯性の巨木でガジュマルの類である。「提」「檂」「檍」を「ゆずりは」と読むことについては今のところ不審のままであるが、「橡」については後に「椢」との関係で言及したい。また、「杼」は「橡」に同じと認識されていたようであり[62]、「椪」も「椢」の異体字と思われる[63]。

以上まで、地名・寺社名と古辞書の「ゆずりは」に充てられた漢字の概略の状況を見てきた。以下では、「杠（杜）」「椢」「楪（櫟）」の各漢字について、やや詳しく考究を加え、関連して「樹」「植」についても言及したい[64]。

## 3.「杠」「杜」「椢」

『色葉字類抄』を始めとする諸字書に「杠 ユツリハ」とあって、日本では「杠」字を「ゆずりは」にあてることが広く行われたことは間違いない。しかし、『説文解字』には、

杠　牀前横木也。从木，工聲。

とあり[65]、『大廣益會玉篇』も次のように記す[66]。

杠　古龍切 爾雅曰 素錦綢杠 以白地錦韜旗之竿 又石杠 今之石橋 又牀前横也

『爾雅』の「素錦綢杠」とは「白地錦」で包み飾った旗竿だとの解釈が添えられているが、『文明本節用集』などが「杠」を「旗飾」とするのは[67]、この『爾雅』あたりを源として、直接には『廣韻』や『龍龕手鑑』の「杠 旌旗飾」などの記載を承けてであろうかと思われる[68]。しかし、「杠」の語義として、中国での主流になっていたのは「横木」「旗竿」「石橋」などのようで、これを承けて、例えば『篆隷萬象名義』には「杠 古龍反 牀前横也 石橋也」[69]とあり、『下学集』の「杠」の項が「漢字ニハ旗ノ竿也」と記すのは、中国での一般的な用法を受け止めてのことである。「横木」「旗竿」などの根底には、“真っ直ぐの棒”といった本義があるようだが[70]、だからこそ、日本でその「杠」字に「ゆずりは」をあてる理由については誰もが不審を感じていた。貝原益軒は『花譜』「譲葉（ゆつりは）」の項に、「和書に杠の字をかく其出處おほつかなし」と記し[71]、また、『壒嚢鈔』「歯朶（シダ）ノ事」も、

正月ニ用ルシダ、ユツリ葉ナント云文字如何ム。是モ慥ナル本説ハ不レ見侍ラ共、歯朶（シダ）ト書、ヨハヒノヱダト書ル祝ノ心歟。杠（コウ）ヲユヅリハトヨム、杠ハ古彪ノ反、漢朝ニハ旗飾（ハタノカサリ）トスル也

とおぼつかない[72]。『倭訓栞』「ゆづるは」の項には「杠ハ杜の誤」とあるが[73]、「杜」字は古くは「かつら」や「もり」と訓読された字である[74]。『古事類苑』に引く『本草一家言』には「杜」を「かつら」と訓むのは、思うに「桂」の旁の半分を省略したものだとあるが[75]、その当否は別としても、「桂」「かつら」と「ゆずりは」は明らかに別の木である。そもそも、「杠ハ杜の誤」というよりは「杜は杠の誤り」とすべきであるのは、古辞書類の記述を並べて

みれば明らかである。

では何故「杠」を「ゆずりは」と訓むのか。ここに注目すべきことが二つある。一つは樹木名・本草名としての「杠」であり、もう一つは中国の方言である。

### ⑴ 樹木名としての「杠」と「棡」

漢語の「杠」にも、実は「牀前横木」や「旗竿」などだけではなく、樹木名としての用法がある。韓立主編『漢拉英中草薬名称』には、

杠木　Gangmu〔中略〕Quercus liaotungensis Koidz. 辽东栎

の一項が記されてあるが[76]、これは和名をリョウトウナラ(遼東櫟)とするブナ科の樹木で、中国北部に常見の樹木である。また、『中薬大辞典』第二巻にも、「コウボク　杠木 gang mu」の一項があり、『寧夏中草薬手冊』に拠って次の記述がある[77]。

〔基原〕ブナ科の植物，遼東櫟(ﾘｮｳﾄｳﾚｷ)の実。

〔原植物〕遼東櫟 Quercus liaotungensis Koidz.　柴樹，青岡柳，小葉青岡とも。

〔薬効と主治〕脾を健やかにし下痢を止める，収斂し止血する，の効能がある。

但し、これらは「ゆずりは」ではなく、「かしわ餅」に使うカシワ Quercus dentata Thunb. と同属で近縁の落葉樹である。そして、この木は「棡」とも呼ばれた。

まず、『漢語大字典』は、「棡」を次のように説明する[78]。

棡 gang1　《集韻》居郎切, 平唐見。①横墻木。《集韻・唐韻》:“棡, 横墻木。”②喬木名。俗名青棡，通名橡樹。〔下略〕

①には「横墻木」とあって、「杠」の「牀前横木」を想起させるが、②によれば、「棡」は「青棡」や「橡樹」とも呼ばれる喬木である。そこで、『中国高等植物図鑑』を開くと「殼斗科 Fagaceae（ブナ科)」の「櫟属 Quercus（コナラ属)」に、この「青棡」、「橡樹」に類似の名称が全部で48種も並んでいる[79]。「遼東櫟《柴樹、青岡柳、小葉青岡》Q.liaotungensis」(《　》内は別称）を始めとして、「柞櫟《槲樹、橡樹、青崗》Q.dentata」「麻櫟《青剛、橡椀樹、櫟》Q.acutissima」「枹櫟《枹樹、青崗樹、柞木》Q.glandulifera」「白櫟《白反櫟、青岡樹》Q.fabri」等々である。「橡樹」「橡椀樹」など「橡」字を含むものが存在することにも留意しておきたいが、別称まで含めれば、「青岡」「青剛」「青崗」などが、14種にも上る。「岡」「剛」「崗」は字形が異なっても、『漢語大字典』の「棡」に同義と思われる。これらは皆、カシワ Quercus dentata と同属で、その一種「遼東櫟（柴樹、青岡柳、小葉青岡)」は、さきに見た『漢拉英中草薬名称』や『中薬大辞典』では「杠木」と呼ばれていたのである。「棡」が「杠木」に同じ木であることが確認される。

また、『漢語大字典』の「青棡」に同名と思われる「青岡」が、『植物名實圖考』にも記載されており、そこにはカシワに近い図が掲げられている[80]。さらに、『植物名實圖考長編』に引く『遵義府志』は、「棡木」に「青岡」「羅鬼青棡」「水青棡」「紅紬青棡」の数種類があるとして、薪炭とはなるものの棟梁とはなり得ないとしている[81]。この材質はカシワを含めたコナラ属のものであろう。こうして、「岡」と「棡」が区別のなく用いられること

が再確認されるが、その「岡」は「杠」に同音と認識されていた。明・梅膺祚の『字彙』辰集の「杠」の項には「杠 居郎切 音岡」とあって、「杠」と「岡」が同音であるとしている[82]。つまり「棡」「岡」が「杠」に同音と認識されていたため、もともと「棡」と表記された字が「杠」に簡略化された可能性が高いのである。「棡」と「杠」は同字であったと見ることができる。

### ⑵ 「棡（杠）」と「ゆずりは」の関係

このカシワなどコナラ属の「棡（杠）」を日本では「ゆづるは」と訓んだのである。前に引いた『塵芥』が「橡」に「ユツリハ」の訓を与えているのも、「橡」が「棡」の俗名、通名である以上、当然と言えよう。また、小浜･明通寺の「棡木」を「ゆずりぎ」と読み、地名「ゆずりはら」を「棡原」と表記するのも「ゆずりは」の変形である。

では何故「棡（杠）」を「ゆずりは」と訓むのか。「棡（杠）」と「ゆずりは」の間には落葉樹と常緑樹といった外見上の大きな違いがある。だから、例えば、山中襄太『続・地名語源辞典』の「棡原」の項に「ユズリと読む理由はわからぬ」とあるのも[83]、貝原益軒が「杠」を「ゆずりは」とする理由を「おぼつかなし」とするのと同じで、どちらも謎である。ただ、確かな推測は未だできないものの、「棡（杠）」と「ゆずりは」の双方に相通じる所が無いわけではない。

その一つは、どちらも薬効を持った本草であるという点である。前掲『中薬大辞典』などに見えるとおり、カシワの類の「棡（杠）」は一定の薬効を持った本草であった。一方、「ゆずりは」はどうか。『閑窻瑣談』四、「春盤（くひつみ）」に以下の記載がある[84]。

> 杠葉（ゆづりは）は腹中（はらのなか）のこなれあしく支（つかへ）るによし。酒（さけ）の熱（ねつ）を醒（さま）して、胸中（むねのうち）の苦（くる）しきを治（なを）す。この外、薬にあはして、いろいろに用ゆ。

また、上原敬二『樹木大図説』には「葉の煎汁は健胃剤となる」とあり、『日本国語大辞典』も「樹皮の煎じ汁を駆虫薬に用い」るとしている。さらに、有岡利幸『資料日本植物文化誌』は「薬用とする部分は、樹皮と葉で、交譲木（こうじょうぼく）とよばれる。民間では駆虫、できもの、去痰（きょたん）、利尿薬として用いられる」としている[85]。効能の記述に差があり、それほど強い薬効を示すものではなさそうだが、少なくとも、民間薬としての「ゆずりは」が存在していたことは確かであろう[86]。ただ、これらは、あくまで日本における民間薬としての「ゆずりは」である。薬効も、中国の本草、カシワの類の「棡（杠）」が「下痢を止める」などと明確に認められているのとは異なる。では、中国歴代の本草書はどうかと見ても、今のところユズリハ Daphniphyllum macropodum に関する記載を直接には見出すことができないでいている。ただ、ユズリハと同属の「牛耳楓 D. calycinum（一名、嶺南虎皮楠、假楠木）」は『中薬大辞典』にも記載があって、「杠木」（遼東楤）Quercus liaotungensis に似た薬効を持っている[87]。勿論、これだけでの理由で直ちに両者の間に“混同”が生じたとは断定できないが、薬効があるということに神聖・神秘の力を強く感じたであろう古代人にとっては、両者の共通項として意識された可能性は否めない。

ところで、日本には、「かしわ」を「ゆずりは」と呼ぶ地方が存在する。印旛郡國語教育研究部が昭和の初めに行った調査によれば、「印旛郡遠山村」では「かしわ」を「ゆずりは」と称する[88]。また、農商務省山林局編『日本樹木名方言集』には、「〈通称〉カシハ〈学名〉Q. dentata Thunb.」の〈方言〉として「ユヅリハ（甲州吉田）」が挙げられている[89]。

こうした例を見ると、「ゆずりは」と「かしわ」をどこかで“混同”、或いは“同類視”していた可能性も否定できなくなる。上記印旛郡の調査報告には「この木新芽が出るまで、枯葉落ちず。故に代々家をかたく傳へるといふ祝ひの意にてこの名ありと、村の人は言へり」との採集者註が付けられているが、「ゆずりは」を「譲り葉」とする中世以降の解釈に影響されているようで、必ずしも同意できない。“混同”の原因は、より古く、深くに存在するように思われる。

「かしわ」が日本では“葉守の神”が宿るとされ、神聖視されたことは、『枕草子』に「葉守りの神のますらむも、いとをかし」とあることで明らかである。その『枕草子』は「かしわ」賛美の直前に「ゆずりは」賛美の一節を置いている[90]。この連続して記されることの意味については、拙稿「「ゆずりは」の文化史と名称の由来」でも触れたが、「ゆずりは」の葉は艶やかで常緑であることに加え、冬の葉柄は赤色が目立ち、生命力を感じさせる神聖な葉とされた。年越しの折にやってくる亡霊への供え物に敷くのに用いられたのもその神聖さの故である。一方、「かしわ」の語源は「膳（かしは）」「炊（かし）き葉」であり、葉は神饌を載せるのに用いられた。だから、どちらもが神聖さと生命力によって辟邪の力を持つと信仰され、神饌を載せるのに用いられたのである。このことが両者を“混同”させた最大の理由かも知れない。或いはカシワもユズリハも同じ「炊き葉」として“同類視”されたのかも知れない。そして、こうした名残が各地の方言となって残っているとは考えられないだろうか。両者は葉の形状が食物を載せるのに便利な広さを持っているということだけではなく、「ゆずりは」はつややかな常緑葉に生命力が宿る、神聖な葉としてあり、一方の「かしわ」は、印旛の報告にもあるとおり、新葉が出ても暫くは前年の枯れ葉が残るため、“葉守の神”が宿るとされた。また、「かしわ」には、緑葉も摘み取ったあとも簡単に萎れず長く柔軟性を保つことや、前に見たように薬効があることなども神聖視される原因になったと思われるが、これらの特長は「ゆずりは」にも共通する。「ゆずりは」の薬効についても前述の通りだが、寺山宏著『和漢古典植物考』の「ゆずりは」の項には、「ゆずりはの葉は摘みとってから仲々しおれないのも、この葉がめでたいものとされる理由である」との指摘がある[91]。そして、これらの性質は神饌の皿としての実用性をも保証したであろう。

なお、神饌の下に敷くという共通点は、次章に述べる「楪」「榛」でも重要である。

### ⑶ 「杠」の方言（「樹」「植」と「杠」）

次に、中国の方言であるが、漢・揚雄撰『輶軒使者絶代語釋別國方言』（以下『揚子方言』と略す）第五に、

樹　牀，齊魯之間謂之簀，（牀版也。音迮。）陳楚之間謂之第。（音滓，亦音姊。）　其杠，

北燕朝鮮之間謂之樹，自關而西秦晉之間謂之杠，南楚之間謂之趙，（趙當作兆，聲之轉也。中國亦呼杠爲桃牀，皆通也。）東齊海岱之間謂之楼。（音先。） 其上板，衛之北郊趙魏之間謂之牒，（簡牒。）或謂牖。（履屬。）

とあって、中国の東北地方から朝鮮にかけて、「杠」を「樹」と呼ぶことが見える。また、同地方については、同書第七に「樹植，立也。燕之外郊朝鮮洌水之間凡言置立者謂之樹植」といった記述もある[92]。この地方での用法が影響して、日本で「樹」「植」と「杠」を同義字と認識させるに至った可能性を感じることができる。この「樹」の用法については『廣雅』にも「樹、朓、杠也」と記されていて、中国でもやや広く認知されるようになったと思われる[93]。また「樹」だけでなく、「植」にも「木柱」とか「筆直」といった義があって[94]、「杠」の本義“真っ直ぐの棒”と通じるものがある。つまり、「樹」も「植」も「杠」(“真っ直ぐの棒”) であるが、その「杠」は「棡」に同字で、「かしわ」の類であることになる。こうして「樹」「植」も日本に入って「ゆずりは」に当てられた。『類聚名義抄』（観智院本）は「植」字に、『色葉字類抄』は「樹」字に「ゆずりは」の義を当てていた。古辞書類には「樹」の異体字や「橡」や「杼」など「棡」の別称も多い。すべて「かしわ」の類ではあるが、それらを「ゆずりは」と訓むことが広汎に行き亘っていたと思われる。しかし、「ゆずりは」を、他の樹木と区別して特別に“真っ直ぐに立つ木”として特徴づけるには無理がある。『揚子方言』の記述も「樹」「植」「杠」三者の同義を示唆するだけで、「ゆずりは」と認識する理由にはなりえない。ところが『揚子方言』は、「杠」が「牖」や「牒」とも関係深いことを記している。この「牒」には「楪」「櫟」などと通ずるものがある。「楪」「櫟」も「ゆずりは」と訓まれた字である。

## 4.「楪」「櫟」

「ゆずりは」には「楪」字や「櫟」字を当てる古辞書類の用例は既に列挙したが、『書言字考節用集』には、「楪嶽（ユヅリハガダケ） 淡州三原郡」「楪葉尾（ユヅリハヽヲ） 江州坂田郡」などの地名表記もある[95]。また、今でも、地名や人名では「楪」字や「櫟」字が「ゆずりは」と読まれている[96]。固有名詞以外でも、16 世紀の天正狂言本には『楪（ゆつりは)』があり[97]、現行の狂言にも「松楪(まつゆづりは)」がある[98]。また、小野蘭山『重修本草綱目啓蒙』二十三香木の「楠」の項には次のようにある[99]。

紀州熊野ニハ嫩葉ヲ採リ食フ、セウグハツナト呼ブ、俚語諸木嫩葉ノ食フベキ者ヲ皆ナト呼ブ、又江州竹生島ヨリ嫩葉ヲ乾シテ貢上ス、其名産ナリ、ソノ器ニ楪緑ト銘ス、楪ハユヅリハノ和語ナリ、

食用となった「ゆずりは」の若葉は「楪緑」と称したのである。さらには、俳諧、俳句の世界でも、新年の季語「ゆずりは」には「楪（櫟)」字が広く使われている[100]。

このように、中世から近世にかけて、「ゆずりは」に「楪」や「櫟」の字をあてることは大いに普及した。しかし、なぜこの字を用いるかは、「杠」「棡」と同じく謎だったので

ある。例えば、前に引いた『倭訓栞』「ゆづるは」の項は、「杠ハ杜の誤」に続けて「楪又椢も心得かたし」と記している[101]。

この「楪」字の旁「枼」については、許慎『説文解字』に次のようにある[102]。

枼　牖也。枼，薄也。从木，世聲。

この「牖」が「杠」に通じることは『方言』に記されてあって、既に言及したところである。また、徐鍇『説文解字繫傳』は「牖」字を「楄」に作り、次の注を付けている[103]。

楄者闊也，枼之言 葉也，如木葉之薄也，亦接反。

許慎は「枼」を形声字としているが、そもそもは木の葉を象ったものであろう。これに「艹(草冠)」をかぶせれば「葉」であり、義符「木」を加えれば、「楪」、「櫟」となる。これが、葉に特徴があり神聖視された「ゆずりは」の字として、中世以降の日本で用いられたのであるから、国字・国訓の類と見ることもできそうではある。事実、この「櫟」や「楪」は異体字も含めて、『類聚名義抄』以前の古辞書では、「ゆずりは」とは認められていないように見える。例えば、『新撰字鏡』と『類聚名義抄』の「楪」は次のようである。

楪　餘渉反 牖也 薄枼二字同　(天治本新撰字鏡[104])

楪　音葉 薄　　楪 或　　枼 正　(類聚名義抄観智院本[105])

いずれも、「薄」の義を挙げて『説文解字』と矛盾しないが、「ゆずりは」の義は無い[106]。

しかし、中世以降の古文書類に見られる「楪」字あるいは「楪子」という単語の用法を見ると少し異なった見方ができそうである。『日本国語大辞典』には、

ちゃつ【楪子】(「ちゃ」「つ」はそれぞれ「楪」「子」の唐宋音) 丸くて浅い朱塗りの木皿。

とあり、『文明本節用集』の「楪子 チャツ 椀具」や『好色五人女』の用例を引いている[107]。

木の葉の象形字「枼」は、許慎や徐鍇も言うように、“平らで薄い”といった基本義を持って、様々な形声字の声符ともなる。「牒」「蝶」「諜」などは、いずれも薄くて平らな形状を持っており、「楪」も『集韻』には、「牒楪　牒牒、小楔、一曰、簡也、或作楪」とあって、「小さな楔」や「簡（ふだ）」を意味する[108]。『漢語大字典』の「楪」の項には、「(一) ye4《廣韻》與渉切」として「窻子」などの意味を示すが、「(二) die2《集韻》達協切」として、

①同“牒”。床簀；床板。〔下略〕　②同“碟”。盛食物的小盤。<u>宋袁文</u>《甕牖閒評》巻六：“古者椀楪以木為之，故椀楪字皆从木。”〔下略〕

と記している[109]。②は現代中国語の「碟子 diezi(小皿)」にまで通じる用法である。そして、これら“平らで薄い”の義から派生してきた用法が、日本の「楪子（ちゃつ)」に繋がるのではないかと思われる。『塵嚢鈔』巻十の「豆子楪子(ツスチャツ)ノ事」には、次のようにある[110]。

豆子(ツス)楪子(チャツ)ト云字ハ何ソ。楪子(チャス)大ニ浅シ、豆子(ツス)小シ深ト書ケリ

こうした食器としての「楪」の用法は、中世以降の古文書類にも多く見られ、かなり普遍的な用法だったことを窺わせる。例えば、大徳寺文書之四・如意庵校割帳・応永十七(1410)年二月の「銀楪十ケ」、東寺百合文書－を・宝徳三（1451）年一〇月の上久世庄華藏庵雑具以下目録の「ちやつ」、同じく東寺百合文書－を・同年同月・彼方寿阿彌華蔵庵器具注文の「くりのへやの分〔中略〕ちゃつ」、また、大徳寺文書別集・真珠庵文書之二・宗純百回

忌真珠庵借物帳・天正八(1580)年十月の「椀　豆子・楪、除」、さらには大徳寺文書之二・入院式掟書・寛永十八(1641)年六月の「和卓、楪子、飽飯」などである[111]。

そして、注目すべきは、これらの「楪」「楪子」が、いずれも寺社での食事や法事に関わる食器としてあることである。この宗教色の濃い器という用法は方言に残された「楪子」でも確認することができる。例えば、内田武志著『静岡県方言集』には次のようにある[112]。

チャツ　神の供物を入れる木皿。(引)

また、土田吉左衛門著『飛驒のことば』には、次のようにある[113]。

ちやつ　(名)銘銘盆。皿様の浅くて丸い木製漆器。多く祭礼や報恩講お菓子などを盛るに用いた。赤・黒・茶色等がある。

さらに、山田秋衛著『名古屋言葉辞典』には次のようにある[114]。

チヤツ　盆の一種。ちや子(つ)。方形の薄い板の四方を上へ反らしこれに漆をかけたもの。初午に芋と油揚げ強飯を盛るとか、祭礼に赤飯と鰻の小串、筍などつけ合せて客に出す器。又は牡丹餅の二つ三つ程をのせ、出花の茶をそえて饗する等。これをチヤツ盛りと称し最もささやかな御馳走として喜ばれる。

こうして見ると、「ゆずりは」が神仏への供物の下に敷かれたことと「楪子(ちゃつ)」の役割が相通じていることが分かる。「楪」「楪子」は、中国では汎用の木製小皿であったのだろうが、日本では神仏への供物をのせる「ゆずりは」の葉の代用ないしはその変化形と意識され、「ゆずりは」を表す漢字として「楪」が用いられた可能性が高い。

「ちゃつ」の用例は、上記『日本国語大辞典』が引くものほかにも、「楪子(チャツ)　椀ノ具」(弘治二(1556)年本『節用集』[115])、「楪(ヱウ)　マト　チヤツ」(『倭玉篇』慶長十五年版本[116])、「楪(チャツ)」(『塵芥』[117])と数多い。そして、これらと同じ辞書が同時に、あるいは同時代の辞書類が、「楪」「樂」を「ゆづりは」とも読んでいるのである。

## 5．まとめ

「ゆずりは」は日本では多様な漢字を以て表された。和語に字訓を利用して漢字を当てたものには、語源に忠実な「弓弦(絃)葉」のほかにも、「諭鶴羽」や「弓絃羽」などがある。また、漢語に「ゆずりは」の字訓を与えたと思しきものとしては、初めに「樹」「植」があり、中世以降は「杠」「橦」「楪」「樂」などが主流となり、時には「橡」「杼」なども用いられた。これら漢語については、なぜ「ゆずりは」の訓が与えられたのかは不審とされるばかりで、解明されずにいたが、地名や寺社名に残る「ゆずりは」には信仰と深く関わるものの多いことがヒントになるように思われる。「ゆずりは」は、何よりもまず、生命力に満ちた神聖な葉だったのである。

中世以降の用字の主流となった「橦(杠)」は、「樹」「植」なども含めて漢語としては、本来「横木」「旗竿」などの義であるが、樹木としては落葉樹「かしわ」の類を表す。それが、日本では常緑樹「ゆずりは」に当てられたのは、どちらも神聖な木で、葉が神饌や死者へ

の供物を載せるのに用いられたからであろう。混同による一種の誤用であるが、そこには漢字の中国における方言の用法や、双方に薬効の認められることも作用している可能性がある。

また、「楪（樸）」も漢語としては小皿を表す語であるが、日本で神饌の敷物としての「ゆずりは」に同定されたものと思われる。「ゆずりは」に対する日本人の信仰は、その茂る山や森を信仰の地とし、その葉を神饌の皿としつつ、その名の表記に小皿を表す漢語「楪」「樸」を以てしたのである。

こうした「ゆずりは」が、語源を反映した「ゆつるは（弓弦葉）」の表記から「ゆづりは」へと変化していくのは中世初頭に始まるようだが、“神饌の皿”として神聖視された理由も、常緑葉の生命力に神を見たことから離れて、家督相続を象徴する「譲り葉」のめでたさへと次第に変貌し、やがては漢語の「交譲木」「譲木」と誤同定されるに至るのであろう。この「交譲木」「譲木」や「楠」などとの同定については、稿を改めて検討したい。

注

1　本論文中での植物名の表記は、次の原則による。①図鑑などに汎用される標準和名は片仮名で記し、必要に応じて〈学名（ラテン名）〉を添える。②市井の日常生活で用いられてきた“伝統的呼称”は、基本的に平仮名で表記する。　但し、引用文中では原典の表記に従う。
2　他にも、「弓弦羽」や「諭鶴羽」「遊鶴羽」などが用いられたが、これらは地名や寺社名となった場合に限られるように見える。和語の「ゆずりは」については、「弓弦（絃）葉」と表記するのが最も語源に近い表記法である。拙稿「「ゆずりは」の文化史と名称の由来」（『桜美林論考 人文研究』第４号、桜美林大学、2013）参照。
3　拙稿「「樟」・「楠」と「くすのき」」（桜美林大学孔子学院編『漢語與漢語教学研究』第２号、東方書店、2011）p.95。
4　例えば、小島憲之等校注・訳、日本古典文学全集『萬葉集』（三）（小学館、1973）p.503 の 3572 番の歌の頭注は「所在未詳」とする。日本古典文学大系『萬葉集三』（岩波書店、1960）p.456 も「未詳」とする。
5　角川文化振興財団編『古代地名大辞典』（角川書店、1999）p.42。
6　この「御井」の所在も未詳とするほかない。ただ、谷川士清纂、井上頼圀等増補『増補語林倭訓栞』（皇典講究所印刷部、1898）下 p.560「ゆづるは」の項に「ゆ弦葉のみ井 萬葉集に見ゆ 吉野にあり」とある。
7　松尾聰等校注・訳、日本古典文学全集『枕草子』（小学館、1974。底本は学習院大学蔵三条西家旧蔵の室町時代書写の所謂「能因本」）p.133。
8　池田亀鑑等校注、日本古典文学大系『枕草子』四十段（岩波書店、1958、底本は所謂「三巻本」系統の岩崎文庫蔵柳原紀光筆本）p.57 の「ゆづるはの峰」の頭注は「摂津」を所在地としている。
9　谷川士清纂、井上頼圀等増補『増補語林倭訓栞』（皇典講究所印刷部、1898）下 p.560「ゆづるは」の項。
10「弓弦羽神社参拝の栞」（弓弦羽神社社務所、2013 受領）の「弓弦羽神社の歴史」。
11　小山弘志等校注訳、日本古典文学全集『謡曲集』（二）（小学館、1975）p444。底本は 17 世紀刊行の「寛永卯月本」。
12　岡田徯志撰、元禄十四年刊『攝陽群談』巻第三、山の部。『大日本地誌大系』（雄山閣、1930）p.36。
13「日本歴史地名大系」第二九巻Ⅰ『兵庫県の地名』（平凡社、1999）p.363。

14 「ゆずりは」との関係は不明ながら、JR 柏原駅の東方（現丹波市柏原町）にも「譲葉山」がある。
15 角川文化振興財団編『古代地名大辞典』（角川書店、1999）p.1497。
16 『長寛勘文』（「甲斐叢書」第一書房、1974）p.7~8 に「熊野權現御垂迹縁起云」として「往昔甲寅年唐乃天台山乃王子信舊跡也。日本國鎮西日子乃山峰雨降給。〔中略〕次六年乎經弓甲子年淡路國乃遊鶴羽乃峰仁渡給次六箇年過〔下略〕」などとある。
17 熊野信仰、修験道といった観点からすれば、六甲山麓の弓弦羽神社も、御祭神は「根本熊野三所権現」であり、また、現宝塚市の譲葉山にも文化年間奉納の磐座が残っており、さらには、丹波市柏原町の譲葉山も地元では「権現さん」と呼ばれ、山頂には権現堂がある。
18 諭鶴羽神社ホームページ「諭鶴羽神社ご案内」（http://www.h3.dion.ne.jp/~yuzuruha/、2013.08 閲覧）によれば、「諭鶴羽山」は古くは「譲葉山」とも書かれ、「神樹ゆづりは木」は「ゆづるは山の名前の由来とも伝えられている」とある。但し、諭鶴羽山神社入口に掲げられた「元熊野宮諭鶴羽宮　諭鶴羽神社ご案内」（2013.08.21）によれば、伊弉諾・伊弉冉の二神が鶴の羽に乗って当地に降臨したから「遊鶴羽（ゆつるは）」の名があるとの社伝もある。
19 日本歴史地名大系第一八巻『福井県の地名』（平凡社、1981）p.641「建武元 (1334) 年一二月日付明通寺衆徒等奏状案（明通寺文書）」。
20 寺僧の言によれば、「橿木」は「ゆずりぎ」、「橿葉」を「ゆずりは」と読むとのことである。寺の象徴ともなっている大木は植栽されたものとも聞いたが、国宝三重塔の東や北の樹林中には自生の成木が、また本堂の北斜面をはじめとして境内には多くの実生の幼木が自生している。
21 例えば、竹内理三編『平安遺文 古文書編』第一巻（東京堂、1964）「貞観十三年八月、安祥寺伽藍縁起資材帳（東寺蔵）」p.156,p.158 などに見える「弓弦羽里」が現京都市山科区四ノ宮付近から大津市にかけての地に、同第五巻「永久元年十二月、玄蕃寮牒案（柳原家記録 159）」p.1632 に見える「弓絃葉里」が現京都府向日市鶏冠井の一地区に、それぞれ比定される。
22 中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄 研究並びに索引－本文・索引編』（風間書房、1964）p.306。
23 室町初期写、大東急記念文庫蔵本。『十巻本伊呂波字類抄 合本五冊』（雄松堂、1987）p.4。
24 寛政十二年頃書写、天理図書館蔵。三宅ちぐさ編著『世俗字類抄 影印ならびに研究・索引』（翰林書房、1998）下八七丁オ。
25 正宗敦夫編、日本古典全集『類聚名義抄』佛下（日本古典全集刊行会、1938）p.345、p.369。草川昇編『五本対照 類聚名義抄和訓集成』（汲古書院、2001）p.412~414。観智院本以外（蓮成院本、高山寺本、西念寺本、図書寮本）では「ゆつるは」「ゆつりは」等の訓は見当たらない。
26 直前にも、「植 音寔 ウフ オフ タツ〔下略〕 櫃 或」とある。
27 京都大学文学部国語学国文学研究室編『天治本新撰字鏡（増訂版）』（臨川書店、1967）p.403 に「樹 特注反 立也 惣木名也」とある。また、同 p.399 には「植 直吏反 又市力反 種也」と「植 上字特吏特職二反 桂也 旁柱曰植 又繫縛柱也 倚」の二字が連続して記されてある。一方、「杜」や「杠」については、同書 p.392 に「杜 徒古反 塞也 閇塞也 跫也 毛利又佐加木」、p.393 に「杠 古雙反 旌旗飾也 橦也 石槁也 支利久比也」とあり、p.415 の小学篇字及本草木異名には「杜 牟祢乃木」とある。京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄〔本文篇〕』（臨川書店、1968）でも、単独の文字として「ゆずりは」や「ゆつるは」の字義を持ったものは見えないし、複合語としても、杠谷樹や杜蘅・杜仲など、「ゆずりは」とは異なった植物を指す。
28 （　）内は引用書名。その後ろに引用諸本の推定成書年などの概略を記す。「樹」「植」「杜」の 3 字体について、「ゆずりは」の訓がないものも、一部参考のため段を下げて収録した。
29 山田忠雄監修・解説『元和三年版下学集』（新生社、1968）p.35。
30 寛文九年刊、早稲田大学図書館蔵版本。近世文学史研究の会編『増補下学集 下巻』（文化書房博文社、1968）p.418。
31 室町時代書写、国立国会図書館蔵本。中田祝夫著『古本節用集六種研究並びに總合索引』（風間書房、1968）p.31。「櫟」の「世」部分を「卅」に作る。以下の諸本も筆遣いの不分明なものが多く、「世」と「卅」の区別や草冠の形状については、引用に際しては区別しない。
32 室町時代中期書写、国立国会図書館蔵本。中田祝夫著『文明節用集研究並びに索引』（風間書房、1970）p.432。

33　明応五年書写、国立国会図書館蔵本。中田祝夫著『古本節用集六種研究並びに總合索引』(風間書房、1968）p.87。
34　室町末期写・弘治二 (1556) 年本、村口四郎氏蔵本。古辞書叢刊刊行会編、原装影印版古辞書叢刊『節用集』（雄松堂書店、1976)。「室町後半期に流行した節用集の内容を伺うには最もふさわしい代表的な傳寫本」（川瀬一馬氏解説)。
35　東洋文庫叢刊 17『天正十八年本節用集』（東洋文庫、1971）下、二十五葉裏。
36　慶長二年刊本、内閣文庫蔵本。與謝野寛等編、日本古典全集『節用集易林本』(日本古典全集刊行会、1926）p.193。
37　東京大学国語研究室蔵本。中田祝夫・根上剛士編『印度本節用集「和漢通用集」他三種研究並びに総合索引（影印篇)』（勉誠社、1980）p.205。印度本節用集は節用集群の中では一般に古資料が多いとされる。
38　宮内庁書陵部蔵本。中田祝夫・根上剛士編『印度本節用集「和漢通用集」他三種研究並びに総合索引（影印篇)』（勉誠社、1980）p.322。
39　森枳園旧蔵本。天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編『天理図書館善本叢書和書之部第二十一巻　節用集二種』（天理大学出版部、1974）p.269。印度本と伊勢本とを折衷したものとされる。
40　室町末期書写、前田家育徳財団尊経閣文庫蔵本。前田家育徳財団尊経閣文庫編、尊経閣善本影印集成 20『節用集黒本本』（八木書店、1999）p.171。
41　室町末期刊本、東京教育大学付属図書館蔵本。『古本節用集六種研究並びに總合索引』（風間書房、1968）p.180。
42　中田祝夫・小林祥次郎編『書言字考節用集研究並びに索引（影印篇)』（風間書房、1973）p.262。元禄十一年、槇島昭武の著になる「書言字考節用集」は江戸末期までに多くの刊本が行われ、近世の多くの著作を反映する。
43　尊経閣文庫蔵本。大伴広公編『温故知新書』(尊経閣善本影印集成 25-1。八木書店、2000) p.258。
44　京都大学附属図書館清家文庫蔵本、船橋家旧蔵本、十六世紀前半の成立。京都大学文学部国語学国文学研究室編『清原宣賢自筆伊路波分類体辞書 塵芥』（臨川書店、1972）p.354。
45　室町中期写、尊經閣文庫蔵。原装影印版古辞書叢刊『世俗字類抄 七巻本』（雄松堂、1973)。「櫟」の字形は「世」の部分を「云」に作る。やや崩れた字形で「樣」の字形に似る。
46『拾篇目集』国立国会図書館蔵（室町中期写)。北恭昭編『倭玉篇五本和訓集成』（汲古書院、1994）p.30。
47　倭玉篇内閣文庫蔵本篇目次第（室町中期写本・和学講談所旧蔵)。中田祝夫・北恭昭編『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』（勉誠社、1976）p.412。
48『玉篇要略集』大東急記念文庫蔵（大永四 (1524) 年写)。北恭昭編『倭玉篇五本和訓集成』（汲古書院、1994）p.961。
49『玉篇略』大東急記念文庫蔵（享禄五 (1532) 年写)。北恭昭編『倭玉篇五本和訓集成』（汲古書院、1994）p.329。「杜」の字形は「土」を「圭」に作る。
50『弘治二年本倭玉篇』大東急記念文庫蔵（弘治二 (1556) 年写)。北恭昭編『倭玉篇五本和訓集成』（汲古書院、1994）p.793~794。「杜」の字形は「土」を「圭」に作る。
51　内閣文庫蔵本倭玉篇（慶長十五年版本)。中田祝夫・北恭昭編『倭玉篇研究並びに索引』（風間書房、1966）p.57~60。中田祝夫、北恭昭両氏によれば、慶長版は、語彙も多くかつ誤刻が少なく内容に信をおけるものとされ、室町時代の種々の倭玉篇を総括し、慶長以後に盛んに刊行された倭玉篇の源流とされる。
52　室町後期～江戸期写、米沢市立図書館蔵『米沢文庫本倭玉篇』（北恭昭編『倭玉篇五本和訓集成』汲古書院、1994）p.541~543。
53　中田祝夫・小林祥次郎編『多識編自筆稿本刊本三種研究並びに総合索引 影印篇』（勉誠社、1977）p.133、291、508。
54『本草和名』巻十四木下（與謝野寛等編「日本古典全集」古典全集刊行會、1926）下巻二葉表には「楠〔楊玄操音南〕和名久須乃歧」とあるが、「ゆずりは」にあたる記述は見当たらない。

55 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』( 岩波書店、1980。底本はオックスフォード大学ボードレイ文庫蔵長崎版日葡辞書 )p.839 に「Yuzzuru. ユヅル（弓弦)」「Yuzzuri,ru,utta. ユヅリ（譲り)」の項があり、両者が同音として認識されていたことだけは確認される。
56 天正十八年本節用集の「弓強葉」は「弓弦葉」の誤写と思われる。
57 拙稿「「ゆずりは」の文化史と名称の由来」(『桜美林論考 人文研究』第 4 号、桜美林大学、2013）参照。
58 李翰文訳注『(文白対照）説文解字』(九州出版社、2006。底本は同治十二年陳昌治刻本、嘉慶十四年孫星衍覆刊宋刻大徐本など以て校点を加えたもの）p.462 に「樹　生植之總名。从木，尌聲。尌，籀文」とある。
59 劉復・李家瑞編『宋元以來俗字譜』(文海出版、民國六十七年）p.31 には『通俗小説』『金瓶梅』など多数の例が収録されている。
60 京都大学文学部国語学国文学研究室編『天治本新撰字鏡（増訂版)』(臨川書店、1967）p.408。群書類従本（同書 p.819）では「都憤反」「牟志呂比」。釋空海編『篆隷萬象名義』(中華書局、1995。高山寺の伝写本を影印した「崇文叢書」第一輯の縮印本）p.124。
61 『大廣益會玉篇』(中華書局、1987）p.62。底本は張氏澤存堂本。
62 例えば、『廣韻』(周祖謨著『廣韻校本』、中華書局、1960、上聲 p.261）には「杼　橡也」とある。
63 『龍龕手鑑』(杉本つとむ編『異体字研究資料集成〈別巻二〉』雄山閣出版、1975）p.256 は、「樒」に字形の似た「樒」を「椢」の通字とする。
64 「ゆずりは」の漢名については、ほかにも『樹木大図説』が掲げる「山黄樹」「道木」などがあるが、「楠」「交譲木」などと共に、「ゆずりは」の同定の問題として稿を改めてとりあげることとする。
65 李翰文訳注『(文白対照）説文解字』(九州出版社、2006）p.474。
66 『大廣益會玉篇』(中華書局、1987）p.61。「横」は「横木」の「木」が脱落したものか。
67 例えば『文明本節用集』の「楪」の項には「或作杠〔中略〕漢字ニハ杠旗飾」とある。
68 周祖謨著『廣韻校本』(中華書局、1960)p.40。日本古典全集別巻『龍龕手鑑』(日本古典全集刊行會、1934）p.300。
69 釋空海編『篆隷萬象名義』(中華書局、1995）p.120。『説文解字』の「牀前横木也」が「牀前横也」となり、『大廣益會玉篇』の「石杠」の義としての「今之石橋」が単に「杠」の義としての「石橋也」となっている。
70 例えば、藤堂明保等編『漢字源』(学習研究社、1988）p.586 は「直線状に貫通した棒」を「杠」の本義とし、「川に一本の木を渡してつくった橋」の義をも記す。
71 貝原益軒『花譜』(京都園藝倶樂部、1937）巻之下 p.120。底本は大典記念京都植物園大森文庫蔵の初版本。
72 濱田敦等編『塵添壒嚢鈔・壒嚢鈔』(臨川書店、1968)巻九 p192。仏書刊行会編纂「大日本仏教全書」150（仏書刊行会、1912）p221 もほぼ同文同一表記。返り点は省略した。
73 谷川士清纂、井上頼圀等増補『増補語林倭訓栞』(皇典講究所印刷部、1898）下 p.560。
74 新訂増補国史大系『日本書紀』(吉川弘文館。1966。寛文九年刊本を底本とし、諸本と対校した校本）第一巻上、神代下に「湯津杜木之杪」とあり、「ユツカツラノスヘ」の傍訓と「杜木、此をば可豆邏と云ふ」の割注がある。「もり」についても『萬葉集』の「名に負へる杜に」(巻九、1751)、「神奈備の伊波瀬の杜」「山代石田の杜」(巻八、1466）などがある。拙稿「「杜」「社」と「もり」」(『千葉工業大学研究報告人文編』28 号、千葉工業大学、1991）参照。
75 『古事類苑』(吉川弘文館、1971）植物部一、木六「ユヅリ葉」の項 p.455~456 に引く『本草一家言』には「杜字日本紀神代巻訓爲加津良、卽與桂同、蓋省桂之上畫耳、當改作桂、不與石楠相預」とある。
76 韓立主編『漢拉英中草薬名称』(福建科学技術出版社、1986）p.176。「辽东栎」は「遼東櫟」の簡体字。
77 上海科学技術出版・小学館編『中薬大辞典』(小学館、1985）第二巻 p.760~761 抜粋。
78 漢語大字典編輯委員会『漢語大字典』(四川辞書出版・湖北辞書出版、1987）二、p.1232。
79 中国科学院植物研究所主編『中国高等植物図鑑』(科学出版社、1972）第一册 p439~462。

80 呉其濬『植物名實圖考』(「中國科學名著」第一集、世界書局、1992）下册 p.856~857 に「青岡樹　救荒本草，青岡樹舊不載所出州土，今處處有之。其木大而結橡斗者爲橡櫟，小而不結橡斗者爲青岡。其青岡樹枝葉條幹皆類橡櫟，但葉色頗青而少，花又味苦，性平無毒」とある。引用部末文の「花又」は『植物名實圖考長編』(「中國科學名著」第二集、世界書局、民國八十）下册 p.1232 では「花叉」である。

81 呉其濬『植物名實圖考長編』(「中國科學名著」第二集、世界書局、民國八十）下册 p.1232 に「椈木有数種曰青岡〔中略〕。羅鬼青椈〔中略〕。水青椈，青葉不凋。紅紬青椈，理紅。性俱剛韌，爲薪炭，無棟梁之用」とある。

82 梅膺祚撰『字彙』(上海辞書出版社、1991）辰集 p.207。

83 山中襄太著『続・地名語源辞典』(校倉書房、1979）p.194 の「椈原」の項には「椈の字は，玉篇に「横檣木」，篇海に「高木也」とあるが，ユズリと読む理由はわからぬ」とある。

84 佐々木貞高撰『閑窻瑣談』(日本随筆大成〈第一期〉14、吉川弘文館、1975）四巻 p.411~413。小字は割注部。

85 有岡利幸著『資料日本植物文化誌』(八坂書房、2005）p.294。

86 小野蘭山『本草綱目啓蒙』に食用とする「楪」が記されているが、後に引用し言及する。

87 上海科学技術出版・小学館編『中薬大辞典』(小学館、1985) 第一巻 p.454「牛耳楓子」〔薬効と主治〕は「南寧市薬物志」を引いて「慢性の痢疾を治す」とする。前掲『中国高等植物図鑑』は「有清熱解毒、活血散瘀之効」とする。

88 印旛郡國語教育研究部編「千葉県印旛郡方言訛語（二)」(高藤武馬編『方言』第五巻第八号、春陽堂、1935）p.68。

89 農商務省山林局編『日本樹木名方言集』(海路書院、2006）p.116~117。

90 松尾聰等校注・訳、日本古典文学全集『枕草子』(小学館、1974）p.133 には「譲る葉の〔中略〕師走のつごもりにしも、時めきて、亡き人の物にも敷くにやと、あはれなるに〔中略〕紅葉せむ世やと言ひたるも、たのもしかし」などとあり、続けて「柏木いとをかし。葉守りの神のますらむも、いとをかし」とある。

91 寺山宏著『和漢古典植物考』(八坂書房、2003）p.630。拙稿「「柏」と「かしは」」(『千葉工業大学研究報告人文編』27 号、千葉工業大学、1990）p.51~52 参照。

92 周祖謨校箋『方言校箋』(中華書局、1993、底本は四部叢刊本）第五 p.37~38。第七 p.50。(　) 内の小字は郭注。

93 王念孫撰『廣雅疏證』(台湾中華書局、1970）巻第八上三十三裏。

94 最近の辞書でも、例えば、漢語大字典編輯委員会『漢語大字典』(四川辞書出版・湖北辞書出版 1987）p.1225 には「②木注」「⑤平直；筆直」「⑨樹立」などの義が記されてある。

95 中田祝夫・小林祥次郎編『書言字考節用集研究並びに索引（影印篇)』(風間書房、1973）p.68。

96 「楪（ゆずりは)」(山形県鶴岡市)、「楪城（ゆずりはじょう)」(岡山県新見市)、「楪山（ゆずりはやま)」(高知県幡多郡）などの地名があり、また、所謂「人名用漢字」には入れられていないが、名字にも用いられている。

97 拙稿「「ゆずりは」の文化史と名称の由来」(『桜美林論考　人文研究』第 4 号、桜美林大学、2013）p.57 参照。

98 北川忠彦等校注、日本古典文学全集『狂言集』(小学館、1972）p.87~101。

99 杉本つとむ編『小野蘭山本草綱目啓蒙―本文・研究・索引―〔新装版〕』(早稲田大学出版部、1986）p.453~454。この「ゆずりは」を食用とすることには、前述の本草として用法に通じるかも知れない。

100 富安風生ら編『俳句歳時記』(平凡社 1959) p.233~234「新年」【植物】の「楪（ゆずりは)」には、「楪の赤き筋こそにじみたれ：高浜虚子（定本虚子全集)」や「楪のこぼれて青き畳かな：渡辺大年（若葉)」などの句が示されている。有岡利幸著『資料日本植物文化誌』(八坂書房、2005）p.294 には「楪（ゆづりは）や失いて知る親の恩（片岡真紀子)」の句が収められているが、これは「ゆずりは」を親子草と呼ぶことを踏まえた句であろう。

101 谷川士清纂、井上頼圀等増補『増補語林倭訓栞』(皇典講究所印刷部、1898）下 p.560。

102 梁光華注評『唐写本説文解字木部箋異注評』（貴州人民出版、1998）p.285。
103 徐鍇撰『説文解字繫傳』（中華書局、1987、祁嶲藻刻本影印）「栞」の項、p.119。
104 京都大学文学部国語学国文学研究室編『天治本新撰字鏡（増訂版）』（臨川書店、1967）p.406。
105 正宗敦夫編、日本古典全集『類聚名義抄』（日本古典全集刊行会、1938）佛下本一〇八。冒頭の「楪」と次の小字「葉」の字形は「世」の部分を「云」に作るもので、『龍龕手鑑』（杉本つとむ編『異体字研究資料集成〈別巻二〉』雄山閣出版、1975）p.257 は、「葉」の俗字とする。後の「楪」「栞」の字形は、「世」部分を「卅」に作る。
106 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄〔本文篇〕』（臨川書店、1968）でも「楪」「楪」は見当たらず、「枻」に「枻　野王案枻〈音曳字亦作栧 和名不奈太那〉大船旁板也」とある。中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄研究並びに索引－本文・索引編』（風間書房、1964）には「戽 トリ 正 故洩舟中水之斗也」のあと「楪枑 同 除船内水器也」とあるが、いずれも樹木名ではない。
107 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』（小学館、1976）第十三巻、p.410。
108 宋・丁度等編『集韻』（台湾中華書局、民國 69。據棟亭五種本校刊）入声十、二十九裏。
109 漢語大字典編輯委員会編『漢語大字典』（四川辞書出版・湖北辞書出版、1987）二、p.1243。
110 濱田敦ら編『塵添壒嚢鈔・壒嚢鈔』（臨川書店、1968）p218。仏書刊行会編纂「大日本仏教全書」150（仏書刊行会、1912）p252 もほぼ同文同一表記。国語大辞典の引く表記は「つす、ちゃつなんどと云、字は何ぞ楪子（ちゃす）大に浅し、豆子（つす）小に深し」。
111 東京大学史料編纂所データベース（http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller）2013 年 8 月閲覧。
112 内田武志著『静岡県方言集』（麗澤叢書刊行会、1934）p.31。文末の（引）は使用地（静岡県引佐郡）の略号。
113 土田吉左衛門著『飛騨のことば』（濃飛民俗の会、1959）p.428。
114 山田秋衛著『名古屋言葉辞典』（泰文堂、1961）p.122。
115 室町末期写・弘治二（1556）年本『節用集』（村口四郎氏蔵本。古辞書叢刊刊行会編、原装影印版古辞書叢刊『節用集』雄松堂書店、1976）「智、財宝」。「楪」の字形は、「世」部分を「卅」に作る。
116 内閣文庫蔵本倭玉篇（慶長十五年版本）。中田祝夫・北恭昭編『倭玉篇研究並びに索引』（風間書房、1966）p.60。
117 『塵芥』（京都大学附属図書館清家文庫蔵本、船橋家旧蔵本。京都大学文学部国語学国文学研究室編『清原宣賢自筆伊路波分類体辞書　塵芥』臨川書店、1972）p.79。